

歌と写真で綴る薩摩の脇道

— 歌三昧の史跡巡礼, その6-3 —

キラメキテラス ヘルスケアホスピタル | 栗 博志・高田 昌実・田島 紘己・上村 章
 | 加治木温泉病院 | 夏越 祥次 | 東区・荒田支部 | 栗 隆志
 | 大海・大海宮崎クリニック | 大西 浩之・海江田 寛・牧野 智礼

西郷について書きすすめているが、西郷の活躍の場は、主に藩外であった。

ここでは、西郷の生きた時代の流れ（安政の大獄～月照との入水まで）を概観するが、一休みして、まず数多くある南洲の漢詩の中から、喫茶に関する七言絶句を鑑賞しよう（韻は、空・蟲・好・中）。

読み下し文で紹介する。簡約は宗博。

『秋晩に茶を煎る』
 疎星の残影 寒空に散じ
 林際霜に和して 晴を語る蟲あり
 茶鼎の松濤 聴くも亦好し
 従来香味は 曉烟の中 （南洲）

（夜明け方）寒空には消え残った疎な星が光っている。林の際に降りた霜にまぎれて、今日は秋晴れだよと虫が鳴いている。

茶釜がシュンシュンと松濤（松風の音）を立てているのを聴くもよし、更には、朝もやのこもる、明け方に茶の味と香りを味わう事は、この上ない楽しみである。

作者の視線は、広大な宇宙の星達のかすかにきらめく光に向けられる。だんだん夜が明けてくる。寒々とした中、色彩も淡い。作者はまず、視覚に訴える。かすかな光の中、果てしない宇宙が、あたりを包み込む。

次に視線を落す。庭の林の際には、白く霜が降り、何やら、晴れを告げる虫の声も聞こえてくる。地面の白い霜と、秋晴れの青空が連想される。視覚に加え、より身近な聴覚にも訴えてくる。

視線を更に落すと、場面は部屋の中に変る。狭い部屋の囲炉裏（炉）には、赤赤と

火が燃え、茶釜はシュン・シュンと音を立て、白い湯げが立ち上る。色覚、聴覚が更に研ぎ澄まされる。部屋の中は暖かい。

視線は、更に茶碗の中の緑も鮮やかな茶に集束され、最終的に、身体の中、つまり口の中から喉元を通り過ぎるあったかい茶の、味と香り、つまり味覚と嗅覚に移る。

一服の茶は、一日の始まりに、身体中に生気を漲らせてくれる。

ここで、もやがかかっているのに、なぜ星が見えるのか？、などと理屈をこねる人は、日本の「をかし」を解さない人であろう。

南洲は一服の茶の理想の姿を読んだのである。彼は28文字の中に、五感の全てを、そして烟という言葉を用いる事によって、空気感までも表現している。南洲の芸術的センスの良さと、創造力の豊かさを認識させられる。南洲畏るべし。

普通の釜では、シュン・シュンという松濤は生じない。茶釜の後始末をする人は皆知っているが、釜の底に小さい鉄板が張り付けられている。これが、沸いた湯の対流に変化をもたらし、松濤を生じさせる。

数百年前の茶人、釜師の工夫に驚かされる。茶の世界では、音も楽しむ。

松濤は茶人の好む言葉の一つであり、私も好きである。南洲が、この言葉を使用しているのは、嬉しい限りである。

図216は、沢庵宗彭の書いた「松濤」である。

沢庵和尚は、紫衣事件後、当時、寺社、公家に対しても絶対的権力を確立してきた徳川幕府に、その不当を抗議し出羽国に流罪となった。



【図 216】沢庵和尚の書「松濤」

時代の濤に耐えてきた老松を吹き抜ける松風の音。何らうんちくを垂れるでもない、この2文字を茶人は好む

いつの時代でも、権力に対する抗議は弾圧される。徳川幕府の統治力は頂点に達しようとしていた。その後、沢庵は許され、第3代将軍・家光の帰依を得た。

「茶の湯は天地中和の気を本として 治世安穩の風俗となれり」

これは、柳生宗矩の茶会に招かれた際の沢庵と、遠州流茶道の祖・小堀遠州との茶の湯談義での沢庵の言葉で、「沢庵和尚茶亭之記」の冒頭である。

では、幕末の大老・井伊直弼の場合は？

〔4〕おゆら騒動～島津斉彬の死～月照との入水までの西郷，および安政の大獄

その後の世の中の動き、西郷の動きを追ってみよう。

西郷の時代の西暦年は、1800年代なので「18」を略す。

・50（嘉永3）年までに、西郷は伊藤茂右

衛門に陽明学を学んでいる。また藩主継承問題で、おゆら騒動が起る。

・51（嘉永4）年、斉彬が第11代藩主に就任すると、西郷はおゆら騒動で罰せられた、斉彬派の人達の復権を願う建白書を提出したが、それを読んだ斉彬は、西郷の文才と藩政に対する熱意と才能を認識した。

・53（嘉永6）年、ペリーが浦賀に来航。これにより、攘夷運動が高まる。

さて藩主になった斉彬が目指したのは、外国の脅威（植民地化政策）に如何に対処すべきかであった。

衆知のように「蘭癖」と言われた斉彬は、欧米の情勢に精通しており、「富国強兵」「殖産興業」をスローガンに、「集成館事業」を展開。大砲鑄造の為の反射炉の建設、洋式大船の建造、紡績等々に力を注ぐと共に、海防の為の砲台構築などに邁進し、将来の外敵に備えた。

一方、国政に於ては、幕府と朝廷の融和を図り、挙国体制を造る事、それに当時、聡明と言われていた一橋慶喜を将軍に擁立し、幕政改革を推進する事が、重要と考えたのである。

幕政改革のためには、将軍の岳父となり、幕府内での発言力を増す事が必要と考えた斉彬は、養女・篤姫を病弱な第13代将軍・家定に嫁すように画策した。

この問題に関しては、その後の話になるが、水戸の徳川斉昭が、斉彬の野心を疑い大反対した。

斉彬は、篤姫が御台所になれば、次期将軍に斉昭の息子の一橋慶喜を立てる計画が、大きく推進する事を斉昭に確約し、斉昭を納得させた。

もちろん、篤姫が御台所の条件を満たす事が第一歩であるが、それに於て、近衛忠熙の養女になる事は、当然の成り行きであった。忠熙の妻・郁姫は、斉彬の父・斉興の養女だった等、両家は深く結ばれていた。

篤姫と家定の婚姻に関しては、藩には調所^{しよ}広郷による3百万両もの貯えがあり、將軍の嫁に相応しい豪華な嫁入り道具の調達などを、斉彬は、全て西郷にまかせていた。田舎者の西郷は、篤姫を守り、共に入城する幾島のアドバイスを受けながら、これを為し遂げた（図217）。



【図217】天保山の松林の中の調所広郷
腰の曲った小さい座像が、前方を見据える。

もちろん近衛家にも高価な金品を、持参金として献上するなどして、近衛家を大いに嬉ばせた事は言うまでもない。

ここに、斉彬、忠熙、篤姫、西郷、それに忠熙の出入りする、清水寺の塔頭・成就院の住職・月照の結び付きは一層強まった。もともと清水寺は、近衛家の祈願寺で、月照と忠熙は交流があった。

ここで重要な事は、孝明天皇に仕える忠熙はもとより、月照も僧とは言え、二人共、れっきとした尊王攘夷派であった。將軍継承問題では、一橋慶喜派であった。

（重ねて申し述べておくが、篤姫の婚姻の話は、まだ後の事である）

・54（嘉永7）年には、日米和親条約が締結される。これは、2港は開港するが、貿易は拒否しており、完全な開国ではない。

この年、西郷は斉彬の御庭方役となり、斉彬から直接、世界情勢などの教えを受け、更に58（安政5）年の斉彬の死まで、斉彬の手足となり、尊王攘夷思想を持ち、一橋慶喜

の將軍擁立を図る藩主や、その側近の藩士達の中に人脈を築き、頭角を現わしてくる。

即ち、水戸藩主・徳川斉昭、越前福井藩主・松平慶永（後の春嶽）らであり、水戸藩士で水戸学の藤田東湖、武田耕雲斎、福井藩士で藩医であった橋本佐内らである。

・56（安政3）年、斉彬の養女・篤姫は、忠熙の養女となり、病弱な第13代將軍・家定の御台所となった。18歳で生家を出て鶴丸城に入った篤姫は、21歳になっていた。斉彬の夢の1つが実現した。家定33歳。

鹿児島を去る時、篤姫は、斉彬から2つの重要な使命を受けていた。1つは、家定の子を生む事、今1つは、「外国の脅威から日本というお国を守るため、家定に次期將軍として、一橋慶喜卿を推薦してほしい」と言う事である（図218）。篤姫と斉彬の連絡係として、西郷の名が告げられた。

一週間に及ぶ婚礼の儀の間、養父・忠熙と養母として、近衛家の老女・村岡が始終付き添った。忠熙の正室・郁姫が死去していたからである。



【図218】天璋院篤姫
その風貌は、聡明さを如実に現す。

ところで、家定が将軍に就任してから、病弱な家定の後継者問題が起っていた。

一橋慶喜を推す斉彬、徳川斉昭らの一橋派と、紀州藩の家老・水野忠央の推す紀州藩主・松平慶福^{ただなか}の南紀派の対立である。

忠央は、慶喜よりも血筋が濃いという理由で、家定の従弟である主君慶福を、次期将軍にと画策していた。

ここで井伊直弼について若干説明する。

彦根藩主の井伊家は、徳川四天皇の一人・井伊直政を祖とし、譜代大名の筆頭という名門であった。

当時、大名家では長男が藩主を継ぎ、他の男子は、他家に養子に行く事が一般的であった。直弼は然し、養子にも行けなかった。

一人だけ取り残された直弼は、将来の無い年3百俵の捨扶持生活を、「埋木舎^{うもれぎのや}」と名付けた、文字通り粗末な家に暮らしていた。

然し、50（嘉永3）年、突然彼に幸運が訪れた。藩主の兄・直亮が死去したのである。直亮に子がいなかったため、14男で年3百俵の直弼が名門大名家の藩主になったのである。36歳であった。

直弼に注目したのが、南紀派の忠央であった。直弼の彦根藩は名門であり、且つ大藩ではない事も幸いしたのか、忠央は彦根藩と協力し、直弼を大老にする事に成功した。直弼は紀州藩に借りができた。

・58（安政5）年、この年は最激変の年となった。

4月に直弼が、幕府の頂点となる役職の大老に就任。

6月19日には、幕府は孝明天皇の勅許を得ずに、日米修好通商条約を米軍艦ポーハン上で締結し、完全な開国を果すと共に、次期将軍を紀州藩主・徳川慶福に決定した。

前者に於ては、攘夷思想の持ち主の孝明天皇が、簡単に条約を認めぬ事は明白で、その事を認識していた直弼は、あえて締結を断行したのである。

後者に於ては、当時、大奥では、水戸の

徳川斉昭の人氣が極めて悪く、従って慶喜の人氣も悪く、慶福の人氣の方が、断然よかった。最終的には、家定が慶福に決定した。

篤姫にとっては、婚前に斉彬から使命を受けていた、一橋慶喜ではなかった。

この決定の後、間もなく、前水戸藩主・徳川斉昭、福井藩主・松平慶永、尾張藩主・徳川慶勝らは、連帯して直弼に嚴重抗議した。

部屋住みから、突然、日の当る藩主となり、更に大老まで申し上った直弼は、好機とばかりに野望を抱いたのだろう。降って湧いたような権力を手にした直弼は、強権政治を開始した。

相手は、御三家の尾張、水戸それに薩摩、福井などの雄藩であり、然も将来の将軍、紀州の徳川慶福は、わずか13歳。

直弼は、一人舞台になったと感じたのだろう。自分一人で花を咲かせようと増長したのだろう。彼は幕府の権威のみを頼りに、最も単純な戦法、強行突破を図った。他の方法を考える余裕は既に無い。

安政の大獄の始まりである!! 一橋派への弾圧であり、攘夷派の弾圧である。

まず、徳川斉昭、松平慶永を謹慎、一橋慶喜の江戸城登城禁止等を科した。

更に7月6日には、篤姫の夫の第13代将軍・家定が死去した。篤姫に死が知らされたのは、なんと8月1日であった。結婚後、わずか1年7ヶ月後の死であった。

篤姫は、直弼に激怒したが、家定亡き後、女の力では、為す術が無かった。

江戸の情勢を知らされた斉彬は、事の重大さを認識し、8月29日～9月1日の上京を予定した。

斉彬は、5千の兵を率いて上京し、朝廷より「朝廷主護および幕政改革の勅許」を得た上で、幕府と対峙し、一橋派の復権を図ろうとしたのである。

その為に、同行する兵の訓練（砲術操練）の観閲を7月8日（新暦8月16日）の炎天

下の天保山で行ったが、その最中に全身状態が悪化し、そのまま7月16日に死去した。

炎天下で軍服姿、死因は様々言われているが、熱中症であろう。斉彬、藩主になってわずか7年、49歳であった。

直ちに、斉彬の養嗣子となっていた島津忠義が第12代藩主となり、その父・久光が後見人（国父）として権力を掌握する。

7月24日、京都の西郷に斉彬の訃報が届いた。西郷は殉死を決意したが、それを翻意させたのが、月照である。

幕府の弾圧が激化した9月10日、近衛家は西郷に月照の身の安全を依頼。

（そして11月16日、月照と西郷は、錦江湾で入水を図る事となる）

戊午の密勅：無勅許の条約締結、慶福の將軍継承指名後に起った最重要問題が戊午の密勅である。

孝明天皇は当初、島津斉彬に下すはずであったが、斉彬が7月に死去したため、朝廷内での正式の手続きを踏まず（密勅）、8月8日、水戸藩に幕政改革を指示する勅書を下賜した。この時、月照も暗躍した。

その内容は、勅許なく条約が締結された事の説明の要求。および御三家、諸藩は、幕府と共に公武合体、攘夷を推進し、幕政改革を命令する、などであった。

（以前の段階では、薩摩藩に彦根城を落城させるという指示もあったとする説もあるようである）

問題は、水戸藩に下した密勅が、幕府に漏洩した事である。

内容が幕府（直弼）の方針と真向から対立するものであり、幕府に知らせる事なく、水戸藩に直接渡された事は、幕府をないがしろにした事になり、直弼のプライドを傷つける事になり、幕府の権威を著しく失墜させた。

幕府は、水戸藩に対し、勅書の朝廷への返納を求め、更には、勅書は水戸藩の陰謀で、孝明天皇の意志ではないとし、安政の大獄の過酷な処分の一因となった。

10月25日、紀州藩主・松平慶福が第14代將軍・徳川家茂として就任した。この時、家茂はまだ13歳であった。

家定の死去、雄藩である薩摩藩の斉彬の死去。若い家茂の將軍就任。大老・直弼は怖いもの無しと思ったのであろう。後は、やりたい放題の弾圧である。

強いと思われる外国に対しては、弱腰外交で無勅許の不平等条約締結を強引に断行したかと思えば、国内では弱いと見做した者には、幕府の権威、虎の威を借りて弾圧を加える。直弼の本性が、現実のものとなってきた。

もし彼が高名な茶人でなければ、このようには思わなかっただろう。彼も又、時代の波に翻弄され、大きなうねりに飲み込まれた一人という印象しか持たなかっただろう。

直弼は、長く困難な時代を、埋木舎で過した苦勞人であった。その間、武芸や茶道などに励み、特に茶道にては、「宗観」の茶名を持ち、著作「茶湯一会集」では、高邁な「一期一会」の精神や、余情残心の感懷を「独座観念」と表現し、熱く説いている。

だが、彼が実際、行った事は、利休居士の「和敬清寂」とは、程遠いものであった。彼の説く所は、彼の信念でも何でもなく、観念上のほんの思いつきに過ぎなかったのである。徳川家の家臣にすぎないのに、彼の横暴ぶりは、徳川宗家の御台所であった篤姫（天璋院）さえも不安に陥れ入れている。（因に、彼は石州流の茶道を学んだ）

付け加えるが、「一期一会」のもとになったのは、利休の一番弟子で、利休から侘び茶の極意を皆伝された、山上宗二の「路地へ入より出るまで、一期に一度の会のように、亭主を可敬畏」（山上宗二記）であり、それ自体は、私共が常に心がけている事で重要な事に相違ない。

最終的に、安政の大獄（58～59年、安政5～6年）で処分を受けたのは、

朝廷の要職者では、青蓮院門主・尊融入

道親王、篤姫の養父・近衛忠熙、鷹司政通、三条実方、一条忠香…。

大名では、御三家の前水戸藩主・徳川斉昭、水戸・徳川慶篤、尾張・徳川慶勝、更に福井・松平春嶽（慶永）、土佐・山内容堂、佐倉・老中堀田正睦…。

藩士では、福井・橋本左内、長州・吉田松陰、薩摩・日下部伊三治…、更には、その妻子まで。

その他、儒学者・頼三樹三郎、医師・坂本龍馬の妻・榑崎龍の父である榑原将作、僧・月照の弟で清水寺成就院住職の信海、俳優・近藤正臣の曾祖父で成就院僧の近藤正慎ら。

近藤正慎は、獄舎で拷問を受け、月照の行方を詰問されるが、白状せず、舌を噛み切った上、獄舎の壁に頭から激突して死亡。

さほどに厳しい弾圧であった。

月照はもとより、西郷にも捕縛の手が迫っていたのである。

このようにして連座した尊王攘夷派、一橋派の人達は、百人以上に及んだ。

安政5～6年、篤姫21～22歳、この年は篤姫にとって最も苦難の時代となった。

安政5年には、将軍継嗣に紀州藩主・徳川慶福が決定。夫・第13代将軍・徳川家定の死。義父・島津斉彬の死。慶福の第14代将軍就任（徳川家茂）。西郷と月照の入水、その後の西郷の島潜伏。

安政6年には、近衛家の老女・村岡（婚儀での養母役）の安政の大獄での押込めの刑、養父・近衛の連座、辞官。そして、篤姫が斉彬の養女になって以来、篤姫の教育係から大奥での今日までの7年余を、共に過ごしてきた幾島との別れ。更には、篤姫をないがしろにし、近衛家まで弾圧する、憎むべき権力者、井伊直弼の存在。

江戸城内で頼れる者が皆無で、孤立無援の状態となった聡明な薩摩女・篤姫は、以後、徳川の女になりきり、徳川家のために生き抜く決心をするのである。

その後、篤姫は再び鹿児島島の土を踏む事をしなかった。

そんな篤姫に一条の光が差す。この光こそ誰だろう、若き紀州藩主・徳川慶福、即ち、第14代将軍・徳川家茂である。

〔5〕月照と西郷の入水、月照の死

月照は町医者の子であったが、14歳の時、縁あって清水寺の塔頭・成就院に入り、22歳で住職になった。僧とは言え、一橋派の尊王主義者であった。

ペリー来航後、住職を弟・信海に譲り（弟も尊王攘夷派の僧）、政治的活動をしていた。

清水寺は近衛家の祈願寺で、近衛忠熙や西郷と交流を持つ事となった。

戊午の密勅に対しては、これを水戸藩に渡すため、近衛家の老女・村岡と暗躍をしたとも言われる。

58（安政5）年、7月24日、斉彬の訃報を知り、殉死を決意した西郷を翻意させたのが、月照であった。

安政の大獄で、幕府の追及の手が月照にも伸びてきた。西郷も安心は、できなかった。

9月10日、近衛家が西郷に月照の身の安全を依頼するまでに、事態は切迫してきた。

この頃すでに、幕府の監視は厳重で、京を脱出する事すら困難であった。西郷は、薩摩に行く事を決断した。



【図 219】月照上人遺跡の碑

月照が宿泊した俵屋の跡地。揮毫は近衛文磨

西郷、月照、月照の従僕・大槻重助それに有馬俊斎の4人は、9月11日、京を出発。

西郷は一人、別行動で、月照の薩摩藩の受け入れに奔走、10月6日に鹿児島に到着。

一方、月照らは監視の目を掻い潜りながら、苦難の末、11月10日、鹿児島に辿り着いた。

斉彬、已に亡く、斉興は健在。忠義、久光体制の藩の対応は、西郷、月照らに極めて冷淡であった。西郷は、さぞ悔しかったろう。

月照は、他国の客のための高級な宿、俵屋に移され、厳重な監視下に置かれた。

俵屋がかつて在った場所（山形屋の対面、鹿銀の裏手）に石碑が建っている（図219）。

幕府寄に傾いていた藩の方針は、藩内で月照が見つかった場合、藩が多大の迷惑を被るので、藩内に留め置けないというものだった。

11月15日、藩に呼び出された西郷は、月照の捕縛のための役人が迫っている事を理由に、藩外の日向方面に潜伏するようにとの命を受け、金十両を渡された。

国境で殺されるかも、と察した西郷は、宿で月照と相談し決心した。

同日夜、俵屋を出発した。西郷、月照、重助、それに平野国臣と船頭の足輕を乗せた船は、錦江湾を一路、福山に向った。

船が竜ヶ水沖に差し掛かった所で、船首付近で語っていた2人は、突然立ち上り、肩を組み、海に飛び込んだのである。11月16日未明、新歴の12月20日であった。

この時期の海は冷たく、急速に体温は奪われただろう。海岸に引き上げられた2人は、村人の焚き火で蘇生が図られた。

西郷は息を吹き返したが、月照は死去。月照45歳であった。

2人を介抱した「西郷蘇生の家」は、日豊本線・花倉駅の近くに遺されている。

月照の墓は、南林寺町の西郷の菩提寺である南洲寺にある。また清水寺成就院にも立派な3つの石碑、中央に月照歌碑、左に信海歌碑、右に西郷隆盛詩碑、そして、月照と共に活動した近藤正慎の碑、更に忠僕重助碑があり、月照が幕末の重要人物であった事を思い起させる。

図220は、道路からみた南洲寺の月照の

案内板、図221は、月照の墓の全景、図222は、月照の辞世の歌2首の歌碑で、歌は入水後の西郷の濡れた紙入れから発見された。覚悟の入水であった事が窺える。



【図220】月照の墓がある南洲寺



【図221】月照の墓の全景



【図222】月照の辞世の歌碑

- ・曇りなき心も月も薩摩湯
沖の波間にやがて入りぬる
- ・大君のためには何かをしからむ
薩摩の迫門に身は沈むとも （月照）

（つづく）